

楽しいブックトーク (学級訪問)

ブックトークとは、一つのテーマに沿って何冊かの本を紹介することです。川越市立図書館では主に小学校3年生を対象に行っています。

ブックトーク (学級訪問) を始めるきっかけとなったのは、昭和62年に霞ヶ関東小学校が学校図書館研究委嘱 (本に親しむ子を育てる指導の工夫) を受け、図書館に協力要請があったことからでした。

当時は教員以外が教育課程に関わることは難しく、また、授業に沿った内容でブックトークをしてほしいという要望があったため、図書館側が考える楽しみのための読書という趣旨とに差があり、協議は難航しました。ところが、実演を見てもらおうと教員のブックトークに対する認識も変わり、是非、全校で行ってほしいと言われ安堵したものです。

実施にあたっては、まずブックトークをできる図書館員を養成することから始めなければならず、市内全校でブックトークを行うことができるようになるまでには、かなりの年数を要しました。

ブックトークの目的は本の内容を教えることではなく、本の面白さを伝えること、そして聞き手にその本を読んでみたいという気持ちを起こさせることです。知らなかった本に出会って、本や読書の楽しさを知ってほしいのです。

さて、ブックトークを行う図書館員も、シナリオを作るという悩める作業をしています。ブックトークを行うには、子どもの本をたくさん読みこなしていることと、子どもの本に関する幅広い知識を持っていることが必要です。どういう視点で子どもの本を選書しているか、蔵書を把握できているかなど、普段からの地道な図書館業務がとても重要となります。



教室でのブックトーク

ブックトークは、シナリオをもとに本の世界を子どもたちに伝えますが、子どもたちの興味や好奇心は様々で、思ってもみないところで歓声があがります。子どもたちとのやりとりは、同じシナリオでもなぜか毎回違うので、今日はどんな子どもたちかな? 興味を持ってくれるかな? とドキドキしながら学校に出かけていきます。「あの本が読みたーい。」ブックトークが終わった後、子どもたちからそう言われたときのうれしさは格別です。

ブックスタートで“すべての赤ちゃんに絵本を！”

「こんにちは。ここでは4か月児健診の前に、ブックスタートについて紹介します。ところで、ブックスタートってどんなものかご存知ですか？」図書館員が保護者の方にするこんなあいさつから、ブックスタートは始まります。

ブックスタートは、「絵本」と「赤ちゃん絵本を楽しむ体験」を贈る事業です。その目的は、読書や早期教育を勧めるものではなく、子育て支援活動のひとつとして行われています。平成4年（1992）に英国で始まり、日本では平成13年4月から、12市町村で始まりました。川越市では、図書館と健康増進課（当時）で協議を重ね、研修やブックスタート協力員養成などの準備を経て、平成15年8月、全国的に見ても早い時期に、この事業を始めることが出来ました。

さて、ブックスタートの現場の様子を見てみましょう。まずは手作りの看板が、赤ちゃんとお家族の方をお出迎えします。看板は図書館員とブックスタート協力員との共同製作で、マスコットはぬくもりのあるフェルト製です。会場では赤ちゃん2人に対して、図書館員またはブックスタート協力員1人が対応します。

席に着いたらブックスタートの始まりです。①ブックスタートについての説明→②絵本の読み聞かせ→③手遊び・ふれあい遊び→④図書館や保健センターからの案内と絵本を手渡す、という流れで行われます。

絵本の読み聞かせを始めると、赤ちゃんの反応は様々です。じっと食い入るように絵本を見たり、絵本に手を伸ばしてみたり、隣の赤ちゃんを見つめあったり、ご機嫌斜めなのか泣き出したり。いろいろな赤ちゃんがいて、図書館員やブックスタート協力員はいつもドキドキしています。また、会場では赤ちゃんの貸出カードを作ることができますので、赤ちゃんも早速、図書館で本を借りることができます。

家族みんなで、絵本を通じて赤ちゃんと一緒にふれあいの時間を持ってもらえるように、そんな願いを込めて、ブックスタート事業を行っています。お渡しした絵本はぜひご家庭で楽しんでください。家族の方に絵本を読んでもらった経験が、赤ちゃんのその後の人生において大きな宝物になることを願っています。



ブックスタートの看板



ブックスタートの様子